

ダヴス版 カーライル著『サーター・リザータス』

司書一課長補佐 内野 陽子

恒例の東京洋書会主催「洋書公開下見展覧入札会」が、5月23日の午後神田小川町の東京古書会館で開催された。昨今の円高とはいえ、古書の価格は年々吊り上がるばかりである。稀観本ともなれば美術品、骨董品と同じである。

今回紹介するダヴス版『サーター・リザータス（衣服哲学）：トイフェルスドレック氏の生活と意見』（Sartor resartus: the life & opinions of Herr Teufelsdröckh, by Thomas Carlyle. London, Doves Press, 1907）[K593.01-C]はその時に購入した一書である。

著者のカーライル(Thomas Carlyle 1795-1881)はスコットランドの南部、イングランドとの境に近いダンフリースシャー(Dumfriesshire)で生まれた。エディンバラ大学では、主に数学と神学を学び、当初は聖職につくつもりであったが途中で断念し、卒業後は偉大な作家になることを夢見てドイツ文学に心を寄せた。1823年から24年にかけてロンドン・マガジン誌に『シラー伝』を発表し、ゲーテの作品も翻訳した。カーライルの特徴を最もよく表した作品『サーター・リザータス』は、1830年から31年にかけてスコットランドのクレーゲンパトックで執筆された。その後研究のためエディンバラからロンドンに移り、チェルシーに居を構えた。1837年『フランス革命史』を出版し、その頃から一流の作家として認められるようになった。代表作には『英雄崇拜論』1841年、『過去と現在』1843年、『フリードリッヒ大王伝』1858-1865年、がある。

1841年には知的好奇心を満足させるため、有力な政治家や文人仲間の協力を得て、イギリスで唯一今に残る会員制公共図書館「ロンドン図書館」

を設立した。過去一世紀半の間にカーライルの残したロンドン図書館の文化遺産によって育まれた現代の研究者・文人も多い。1865年、70歳で母校エディンバラ大学の名誉総長に選ばれている。

『サーター・リザータス』または『衣服哲学』の書名で知られる本書は、副題が示すように、架空の衣服哲学者トイフェルスドレック氏の思想をその人の伝記を語るというたてまえをとって展開し、カーライルが編集補填するという形式で、著者自身の思想を語った評論である。ラテン語の書名“Sartor resartus”とはThe tailor repached（仕立直された仕立屋）の意味で、トイフェルスドレックの意見をカーライルが仕立直したという構成になっている。スコットランドの山中で書かれた原稿は、1833年11月から1834年8月にかけて『フレイザー誌』に連載したが、当時の物質主義、功利主義に反対し、魂と意志の力を信じた痛烈な諷刺とドイツ語的語法は、イギリス国民に認められなかった。友人でアメリカの哲学者エマソンの尽力により、1836年にアメリカで出版された。2年後の1838年ようやくイギリスでの初版の発刊を見たが、本書がその真価を認められ、多数の読者を得るに至るまでには、更に10年の歳月を要した。

本館所蔵のダヴス版は、1907年11月にロンドンのハマースミスにあるダヴス・プレスで紙製300部、ヴェラム(子牛の皮)製本15部印刷し販売された、そのヴェラム製本の1冊である。奥付には植字工、印刷者の名前も記されている。ダヴス・プレス本の特徴は、ほとんど装飾らしいものはなく、清楚で整った美しさを表現している。各頁の見出し語と各章の頭文字を朱刷りとし、単純な中に頁全体の調和がとれている。(4頁の写真参照)

用紙は手すきで、すき入れにはダヴス・プレスを象徴する二羽の鳩と、その下に創設者のイニシャルCSとEWが入っている。

19世紀のイギリスでは、W. モリスのケルムスコット・プレスが印刷界の黄金時代を現出させた。モリスは機械文明の流れに抗し手引印刷機を再興させ、印刷術を純美術の域にまで引き上げた。これが契機となり、モリスの死後コブデン＝サンダーソンはモリスの遺業を継ぎ、E. ウォーカーの協力を得て1893年ダヴス製本工房を設立した。第一次世界大戦中の1916年に閉鎖するまでに、およそ50点に及ぶ作品を印行している。閉鎖と同時にコブデン＝サンダーソンは、ダヴス体活字を他に流用されないようにテムズ河に投げ捨てたともいわれている。

3部より成る本書は、第1部は11章、第2部は10章、第3部は12章の構成になっている。第1部と第3部が哲学の部分で、大自然は神の衣装、肉体は靈魂の衣装、時間・空間は習慣が織る衣装、政治や文明社会も全て裸をおおう人間の衣装の変形である、という思想が展開されている。こうした試みは、カーライルが愛読したスウィフトの思

BOOK I. CHAPTER I. PRELIMINARY.

CONSIDERING OUR PRESENT ADVANCED STATE OF CULTURE, AND HOW THE TORCH OF SCIENCE HAS NOW BEEN BRANDISHED & BORNE ABOUT, WITH MORE OR LESS EFFECT, FOR 5000 YEARS & upwards; how, in these times especially, not only the Torch still burns, and perhaps more fiercely than ever, but innumerable Rush-lights, and Sulphur-matches, kindled thereat, are also glancing in every direction, so that not the smallest cranny or doghole in Nature or Art can remain unilluminated,—it might strike the reflective mind with some surprise that hitherto little or nothing of a fundamental character, whether in the way of Philosophy or History, has been written on the subject of Clothes. (Our Theory of Gravitation is as good as perfect: L'arrange, it is well known, has proved that the Planetary System, on this scheme, will endure forever; Laplace, still more cunningly, even guesses that it could not have been made on any other scheme. Whereby, at least, our nautical Logbooks can be better kept; & water-transport of all kinds has grown more commodious. Of Geology and Geognosy we know enough: what with the labours of our Werners and Huttons, what with the ardent genius of their disciples, it has come about that now, to many a Royal Society, the Creation of a World is little more mysterious than the cooking of a dumpling;

8

想、ドイツ・ロマン主義、特にゲーテ、J. パウル・リヒター等の影響が濃いとされる。第2部は1部および3部とは異質の内容になっている。トイフェルスドレック個人の精神遍歴に的を絞った伝記である。功利主義に裏付けられた当時の人生観は、「永遠の否定」すなわち精神の否定とし、それを超越するために、「無関心の中心」を経て、やがて自我を超越し、時の波にのみれることなく、人間の中に宿る靈感を自覚し「永遠の肯定」に到達する著者自身の思想的遍歴が語られている。

標題紙にはゲーテの有名な言葉「私の土地は何と広大であろう！時間は私の遺産、私の耕地は時間である」(Mein Vermächtniss, wie herrlich weit und breit! Die Ziet ist mein Vermächtniss, mein Acker ist die Zeit. Goethe) が記されている。巻末には各章の要約が付いている。

ドイツ・ロマン派の文学と哲学の影響を受けて書かれた本書は、諷刺的な筆の運びが難解であるが、衣服の歴史に関する部分における博引旁証と莊重とユーモアとを織り交ぜた絢爛たる独自の文体は、今日まで多くの読者を引きつけている。

わが国においては、近代思想史上大きな足跡を残した明治の先覚者たち、文人たちに影響を与えた。優れた教育者であった新渡戸稲造は、本書より大きな感化を受けた一人である。

本書のわが国における翻訳は、1909年(明治42年)刊の土井晩翠*『鬼臈先生衣裳哲学』(大日本図書)以来、1917年に栗原古城『衣裳之哲学』(岩波書店)、高橋五郎『衣服哲学』(玄黄社)、1924年に柳田泉『サーター・リザータス』カーライル全集第4巻(春秋社)、1938年に新渡戸稲造*『衣服哲学』(研究社)、1946年に石田憲次*『衣服哲学』(岩波書店)、1962年に宇山直亮*『衣服の哲学』カーライル選集第1巻(日本教文社)、1983年に谷崎隆昭*『衣服哲学』(山口書店)がある。また研究書として*『衣裳哲学の形成』向井清著(山口書店 1987年刊)がある。(*印は本学図書館所蔵)